

於：日本銀行金融研究所

日時：1999年6月24日（木）

日本銀行金融研究所貨幣史研究会東日本部会第1回研究集会報告

報告者：函館大学商学部 田中 浩司

報告タイトル：日本中世後期の寺院領主経済の構造と銭・金・銀

—16世紀の京都大徳寺塔頭真珠庵文書の紹介を中心に—

【報告の構成】

はじめに—本報告でのアプローチの視座—

第1章 16世紀、真珠庵をめぐる帳簿史料

第2章 16世紀前期の3冊の真珠庵祠堂銭納下帳の性格と構造

第3章 真珠庵祠堂銭納下帳の収支構造

第4章 金の価格変化と流通形態

第5章 悪銭・銭・銀

おわりに

はじめに—本報告のアプローチの視座—

(1) 日本中世の寺院領主経済の構造史研究の手法

本報告では、寺院などの収支帳簿の分析を通じて、寺内の財務セクションの構造やその収支のあり方をさぐる手法をとる

→帳簿史料などの残存量の少なさ、あるいは史料の性格の確定が難しい

(2) 本報告の分析対象

東京大学史料編纂所編纂『大日本古文書 大徳寺文書 別集 真珠庵文書』1～4

→16世紀以降、日本中世最末期にあたる時期の帳簿史料を含む、寺院領主の経済構造を考察する上で大変貴重な史料＝まだ十分に分析がなされていない

○本報告では、この真珠庵文書の分析を中心に、日本中世後期の寺院領主経済の構造の分析と、そこから派生する当該期の銭・悪銭・金・銀の流通についても多少の示唆を与えてみるように試みたい。

第1章 16世紀、真珠庵をめぐる帳簿史料

真珠庵

永享年間（1429～41）の創建。大徳寺の塔頭。一休宗純の塔庵。応仁の乱により焼失。その後、延徳3年（1491）に、和泉の豪商・尾和宗臨によって再興（『京都市の地名』の真珠庵の項）。

真珠庵の経済規模

明応2年（1493）一休宗純の13回忌、永正7年（1510）33回忌などの年忌仏事の納下帳では、仏事執行の費用は400貫文程度。これがMax?。これ以下の経済規模。

真珠庵祠堂方

16世紀前期初見の真珠庵のなかの一つの財務セクション＝「祠堂方」

祠堂方とは

一般に祠堂すなわち寺院の堂塔のことであり、その造営・修造のために、財貨の運用を行っていたセクションと考えられる。

→真珠庵「祠堂方」に関する16世紀前期の二十数年分の収支帳簿「真珠庵祠堂銭納下帳」3点の分析

第2章 16世紀前期の3冊の真珠庵祠堂銭納下帳の性格と構造

3冊の真珠庵祠堂銭納下帳の性格

外題(表題) = 「祠堂方納下帳」

内容 = 寺外への祠堂銭の貸付については記載なし

→「祠堂方」(財務セクション)の収支帳簿

【16世紀前期の真珠庵祠堂銭納下帳】

史料①: 永正9年(1512)3月～永正16年(1519)(途中?)分(3-180号)

史料②: 永正15年(1518)分～大永4年(1524)(途中)分(3-181号)

史料③: 永正15年(1518)分～天文4年(1535)?(3-182号)

史料批判

史料①～③で重複する年次の部分は、②は、①との重複部分を写し、その後を書きつぎ、原本として、作成・勘定の署判をしたもの。

史料①の巻頭部分

【史料a】永正9年3月～12月分の収支

〔収入費目〕

納

先勘残(=くりこし) た印 17貫108文

盆一枚沽却代く龍翔院殿(三条公教)御寄附 5貫文

(7月29日)

性嶽宗観上坐(=祠堂銭の寄進) 2貫167文

材木釘代 5貫622文

已上 29貫900文(=収入合計。合計実数29貫897文)

〔支出費目〕

下行

柚木坪本役員代(=得分権の購入) 18貫230文

龍翔院殿盆修理 400文

已上 18貫630文(=支出合計。誤差なし)

永正九年壬申十二月 日(=決算の年月日)

残 11貫267文(収支残高。29897-18630)

帳簿構成

「納」(=収入の費目)、その最後に収入合計額、

「下行」(=支出費目)、その最後に支出合計額

最後に、決算の年月日と収支の残額

→これが「祠堂方」の1年分の収支。それを数年分まとめて記されたのが史料①～③の帳簿。

記載形式は、史料①～③いずれもかわらない。

記載の単位

この3冊の帳簿が、すべて銭立て
真珠庵の「祠堂方」の起源

【史料a】巻頭の部分に、「先勘銭」（＝繰越金）とあり、これ以前から存在

【史料b】永禄8年 真珠庵衆議定書（『真珠庵文書』1-119号）

「常住銭からすべての支出の支払いを済ませて、それで残った余分は、祠堂料として、質物
をとって貸し付けるように」（

→もともとは、仏事や常住銭の余りを元手にしたもの

第3章 真珠庵祠堂銭納下帳の収支構造

史料①～③の収支を年次別に整理＝【表1】

【表1】真珠庵祠堂方の収支

永正9年(1512)3月～12月分の収支

〔収入費目〕

くりこし(先勘残)	17貫108文
□盆一枚沽却代	5貫文
◎性嶽宗観上坐	2貫167文
□材木釘代	5貫622文
収入合計	29貫900文(実数29貫897文)

〔支出費目〕

柚木坪本役買代(＝得分権の購入)	18貫230文———*
龍翔院殿盆修理	400文

支出合計 18貫630文

〔収支残額〕

11貫267文(収支残高。29897—18630)

永正10年(1513)分

〔収入費目〕

くりこし(去年残)	11貫267文
◎天有道臨上坐	1貫文
□米売代	6貫477文
□釘代	30文
□折敷四片代	120文(折敷1片=30文)
収入合計	18貫900文

〔支出費目〕

米五駄代	7貫文	(米1駄=1400文)
同儀	100文	

支出合計 7貫20文

〔収支残額〕

11貫800文

永正11年(1514)分

〔収入費目〕

くりこし(去年残)	11貫800文
□折敷1片代	120文
◎没倫入牌料	2貫文
□釘代	206文

収入合計	14貫126文
〔支出費目〕	
支出合計	0文
〔収支残額〕	14貫126文

永正12年(1514)分

〔収入費目〕	
くりこし	14貫126文
◎楫叟宗議禪定門	1貫文
◎宗乾上坐	1貫文
□釘代	76文
収入合計	16貫205文
〔支出費目〕	
支出合計	0文
〔収支残額〕	16貫205文

永正13年(1515)分

〔収入費目〕	
くりこし	16貫205文
△侍真方より請取(田地代)	8貫文
△同上	4貫文
収入合計	28貫205文
〔支出費目〕	
田野本役買得	8貫332文————*
〔収支残額〕	19貫870文

永正14年(1516)分

〔収入費目〕	
くりこし	19貫870文
△侍真より請取(袖木坪分)	5貫文
△侍真より請取(袖木坪本役代)	1貫230文
△侍真より請取	1貫文
△月忌方田地代(侍真より)	4貫文
◎珠叟宗室上坐	3貫文
◎珍仙慈室大姉	2貫文
◎宗郁大姉	2貫文
◎安嶽宗養禪門	1貫文
◎瓊室慈玉禪尼	1貫文
◎清泉宗和上坐	1貫文
◎清泉宗和上坐	2貫文
収入合計	43貫103文
〔支出費目〕	
田野本役買得	8貫332文————*
〔収支残額〕	34貫768文

永正15年(1517)分

〔収入費目〕

くりこし	34貫768文
△侍真より請取(月忌方田能分)	1貫700文
△侍真より請取(同田地代)	2貫300文
△侍真より請取	3貫文
△侍真方より(田能田地代)	2貫文
◎嶽雲禪登上坐	1貫文
◎宗和上坐(腰刀代)	1貫文
◎以伝宗心禪門	15貫文
◎宗禪大徳	3貫文
収入合計	63貫768文

〔支出費目〕

常住へ返	2貫文
金1兩買代(金1朱=162文)	2貫600文-----★
金4兩3分1朱々半買代(金1朱=176文)	13貫545文-----★
(伊豆長生より上る金)	
支出合計	※15貫545文

〔収支残額〕 48貫223文

→以上は、①の史料による。以下は②の史料による。

永正15年(1517)分

〔収入費目〕

くりこし	34貫768文
△侍真より請取(月忌方田能分)	1貫700文
△侍真より請取(同田地代)	2貫300文
△侍真より請取	3貫文
△侍真方より(田能田地代)	2貫文
◎嶽雲禪登上坐	1貫文
◎宗和上坐(腰刀代)	1貫文
◎以伝宗心禪門(能勢因幡守)	15貫文
◎宗禪大徳	3貫文
収入合計	63貫768文

〔支出費目〕

常住へ返却 2貫文

〔収支残額〕 61貫768文

永正16年(1518)分

〔収入費目〕

くりこし	61貫768文
△侍真方より(田能田地代)	1貫文
◎宗覚上坐	28貫53文
◎祖心越禪師	3貫文
◎慈慶禪尼	1貫文
◎宗慶庵主	5貫文

収入合計	89貫824文
〔支出費目〕	
市原野田地3段買得代	20貫728文-----*
〔収支残額〕	69貫 93文

永正17年(1519)分

〔収入費目〕	
くりこし	69貫 93文
算用余剰銭	1貫135文
△侍真方より(田能田地代)	3貫文
◎足利義尚入牌料	3貫文
収入合計	76貫231文
〔支出費目〕	
下笠下向路銭	103文
〔収支残額〕	76貫128文

永正18年(1520)分

〔収入費目〕	
くりこし	76貫128文
△侍真方より(田能田地代)	6貫文
◎足利義尚入牌料	3貫文
◎足利義尚分	2貫文
◎寿峯慈松大姉(永平寺より)	5貫文
◎宗和	500文
◎宗覚(喉輪代)	200文
収入合計	92貫828文
〔支出費目〕	
市原野田地半買得(5斗代、1段=6貫文)	3貫文 -----*(3-301号)
同田地1段買得(8斗代)	4貫700文-----*
支出合計	7貫700文
〔収支残額〕	85貫128文

大永2年(1521)～大永3年(1522)分

〔収入費目〕	
くりこし	85貫128文
◎宗観大姉	5貫文
◎宗安上坐	2貫文
◎心海宗信禪門	1貫文
◎宝津祐珍大姉	3貫文
◎長年宗松大姉	5貫文
◎宝林慈珎大姉	15貫文
◎瀧溪宗祐上坐	2貫文
宗長	15貫文
収入合計	133貫128文
〔支出費目〕	

粟田郷田地1段買得代	28貫文	-----*
同使(鐘撞に)	200文	
奈良田6段買得代	45貫文	-----*(3-235号?)
同数米3斗買得代	2貫400文	-----*
同田地口入で堂司へ	300文	
同時雑用	47文	
支出合計	65貫947文	
〔収支残額〕	67貫178文	

大永4年(1523)分

〔収入費目〕		
くりこし	67貫178文	
◎宗観大姉	5貫文	
◎天有道臨上坐	1貫文	
◎長岳理永大姉(若州慈雲庵)	4貫文	
◎玉叟禅琳上坐	2貫文	
収入合計	79貫178文	
〔支出費目〕		
奈良田外事の定使	70文	
この帳の紙	20文	
支出合計	90文	
〔収支残額〕	79貫85文	

大永5年(1524)分

〔収入費目〕		
くりこし	79貫85文	
◎長仲尚久大姉	1貫文	
◎月江宗掬禅門	5貫文	
◎安嶽宗養禅門	1貫文	
◎天外宗秀庵主	5貫文	
◎梅庭信春禅尼	1貫文	
◎機嶽宗縁禅門	5貫文	
収入合計	97貫85文	
〔支出費目〕		
田地4段買得代(売主:納所宗普?)	54貫文	-----*(3-209号)
〔収支残額〕	42貫636文	

大永6年(1525)分

〔収入費目〕		
くりこし	42貫636文	
◎慈勝大姉(赤松刑部少輔後室)	10貫文	
◎華嶽宗栄禅門	5貫文	
◎慈音首座(越前永喜庵内)	3貫文	
◎寿峰慈松分、毎年京進	3貫150文	
◎河原林宗仁居士逆修	194貫479文	

(玉礪絵沽却195貫文内)

◎前溪宗運庵主	2貫文
◎忠林慈孝大姉	1貫文
◎天外信長首座逆修	1貫文
◎紹才禪門	1貫文
◎光室禅旭禪門(朝倉与十郎)	5貫文
収入合計	268貫467文
〔支出費目〕	
薪かふらき本役買得	3貫250文———*
八瀬町田1反買得	8貫22文———*(3-305号)
支出合計	11貫271文
〔収支残額〕	257貫193文

大永7年(1527)分

〔収入費目〕	
くりこし	257貫193文
◎光岳宗昭禪門(飯尾国兼)	1貫文
◎同前	4貫文
◎直心宗正禪門(長田覚友)	1貫文
収入合計	263貫193文
〔収支残額〕	263貫193文

大永8年・享禄元年(1528)分

〔収入費目〕	
くりこし	263貫193文
◎文林慈音首座追納(越前永喜庵)	2貫文
◎玉洞慈金大姉(同南陽寺)	1貫500文
◎祖心禅師追納	2貫文
◎宗節上坐	2貫文
◎紹種上坐	1貫文
◎宗瑤童女(麻殖修理亮孫女)	1貫文
◎壮峰宗勇禪門(栗屋左衛門大夫)	5貫文
収入合計	277貫693文
〔支出費目〕	
氷用田2段買得	19貫文———*
金3分3朱半(1兩代3貫100文也)	3貫文———★
(1朱=194文)	
支出合計	22貫文
〔収支残額〕	255貫693文

享禄2年(1529)分

〔収入費目〕	
くりこし	255貫693文
◎月心宗桂禪門(栗屋薩摩入道)	10貫文
◎慈祥禅尼	1貫文

収入合計	266貫693文	
〔支出費目〕		
金3枚(金1枚=30貫文)	90貫文	-----★
倉田百姓職買得	11貫文	-----*
田地1反買得	10貫文	-----*
支出合計	111貫文	
〔収支残額〕	155貫693文	

享禄3年(1530)分

〔収入費目〕		
くりこし	155貫693文	
◎祖心入牌	5貫文	
◎道禅禅門	5貫文	
◎慈松禅尼	10貫文	
◎文中宗籍上座	5貫文	
◎(山崎)宗鑑上座	10貫文	
△市原野田地下地代	1貫文	
収入合計	191貫693文	
〔支出費目〕		
宗鑑絵、使酒	26文	
水倉百姓職買得代	3貫700文	-----*
花園田地大政所	13貫500文	
支出合計	17貫226文	
〔収支残額〕	174貫467文	

享禄4年(1531)分

〔収入費目〕		
くりこし	174貫467文	
◎睦室大姉	12貫文	
(この内、金にて請取代11貫530文、現銭467文)		
◎明室慈光大姉	1貫文	
◎慈光禅尼(門前部屋)	2貫文	
収入合計	189貫467文	
〔支出費目〕		
金3両3分3朱(睦室入牌料で金買)	11貫530文	-----★
金10両	30貫文	-----★
支出合計	41貫530文	
〔収支残額〕	147貫937文	

享禄5年(1532)~天文3年(1534)分

〔収入費目〕		
くりこし	147貫937文	
◎混首座祠堂料(天文元)	5貫文	
◎大住田地売却代(天文元)	9貫200文	
◎精金信玉座元(天文3)	2貫文	

◎慈光追納（門前部屋）	3貫文	
◎粟屋殿施入（天文3）	6貫文	
◎芳叔承潤上坐（天文3）	1貫文	
収入合計	174貫137文	
〔支出費目〕		
金3両買代（混首座齋料として到来の金）	9貫文	-----★
（→3-277号 享禄5年 宗混金子等贈進状→真珠庵納所宛）		
〔収支残額〕	165貫137文	

天文4年(1535)分1月～9月

〔収入費目〕		
くりこし	165貫137文	
◎宗堅上坐	1貫文	
◎功溪慈徳大姉	10貫文	
◎別宗信聡藏主	1貫文	
◎子天禅師入牌	1貫文	
収入合計	179貫937文	
〔支出費目〕		
金1両3分1朱買	5貫435文	-----★
（駿河福島殿より宗禅仏事のため上る金）		
常住より借りる	40貫文	
支出合計	45貫435文	
〔収支残額〕	133貫702文	

天文4年(1535)分10月～

〔収入費目〕		
くりこし	133貫702文	
☆金3両沽却代（天文3）	8貫800文	
☆金9両3分1朱半沽代（大永2）	30貫514文	
収入合計	173貫16文	
〔支出費目〕		
常住借	5貫435文	
同借	9貫200文	
同借	3貫文	
支出合計	17貫200文	
〔収支残額〕	155貫816文	

収入費目の分類（【表1】から）

- (a) 祠堂料、入牌料・逆修料などの寄進分=◎
- (b) 物品（米、釘など）の売却代金=□
- (c) 寄進・買得所領の売却代金や貢納=△
- (d) 金の売却代金=☆

収入構造

最初の永正9・10年の段階＝材木や釘代などの売却代金

→祠堂方が、本来的な役割である堂宇の修造などを終えて、その残った分の釘や材木を売却？

収入費目の大部分＝(a)の入牌料や祠堂料

収入費目の年次別の変化 (↑↑↑)

永正9・10年などの初期の段階＝□マークの物品の売却代金収入

後になって、◎の祠堂料や入牌料などの収入と△マークの買得所領から貢納やその所領の売却収入のみになってゆく。

税後に金の売却

支出費目

貸付先や食費などはほとんどみえない

→祠堂銭の貸付帳ではない？、祠堂方が禅僧の生活を直接支えるセクションではない

収入規模

初期の10数貫の段階から、祠堂銭や入牌料の収入の伸びにより拡大する。

10数貫の段階では、支出の抑制で経営の安定へ

経営状況

前年度からの繰越額が60貫文を超えた永正16年(1518)から、京都近郊に半段～数段の零細な田地の買得を進める。

→田地（もしくは得分権）の買得は、荘園領主の経営の建て直しの常套手段＝土地収入の安定性。

土地は投資の対象として適当なもの

土地経営の実態

土地からの収入はみえない

→他のセクションで経営か？

収入の安定

大永6年(1526)、「河原林宗仁居士逆修」に際して寄進された「玉かん絵」を売却して得た代金の194貫余が大きな契機＝繰り越し残高は、200貫文を超える

主要な支出先の変化

土地への「投資」から、金の購入へ

【表2】＝【表1】にみえる所領買得、金購入の支出費目の年代的な動向

→なお、表末の天文4年分については、金の売却収入についても付記した。

【表2】【表1】にみえる主要な支出費目

(当該年次の収入総額に対する比率)

永正9年(1512)3月～12月分

柚木坪本役買代(＝得分権の購入) 18貫230文―――* (収入比60%)

永正13年(1515)分

田野本役買得 8貫332文―――* (収入比29%)

永正14年(1516)分

田野本役買得 8貫332文―――* (収入比19%)

永正15年(1517)分

金1両買代(金1朱=162文) 2貫600文―――★@

金4両3分1朱々半買代(金1朱=176文) 13貫545文―――★@ (収入比25%)
(伊豆長生より上の金)

永正16年(1518)分

市原野田地3段買得代 20貫728文―――* (収入比23%)

永正18年(1520)分			
市原野田地半買得(5斗代、1段=6貫文)	3貫文	-----*	
(→3-301号)			
同田地1段買得(8斗代)	4貫700文	-----*	(収入比8%)
大永2年(1521)~大永3年(1522)分			
粟田郷田地1段買得代	28貫文	-----*	
奈良田6段買得代	45貫文	-----*	
(→3-235号?)			
同数米3斗買得代	2貫400文	-----*	(収入比57%)
大永5年(1524)分			
田地4段買得代(売主:納所宗普?)	54貫文	-----*	(収入比56%)
(→3-209号)			
大永6年(1525)分			
薪かふらき本役買得	3貫250文	-----*	
八瀬町田1反買得	8貫22文	-----*	(収入比4%)
(→3-305号)			
大永8年・享禄元年(1528)分			
米用田2段買得	19貫文	-----*	(収入比6%)
金3分3朱半(1兩代3貫100文也)	3貫文	-----★	(収入比1%)
享禄2年(1529)分			
金3枚(金1枚=30貫文)	90貫文	-----★	(収入比33%)
倉田百姓職買得	11貫文	-----*	
田地1反買得	10貫文	-----*	(収入比7%)
享禄3年(1530)分			
水倉百姓職買得代	3貫700文	-----*	(収入比1%)
享禄4年(1531)分			
金3兩3分3朱(睦室入牌料で金買)	11貫530文	-----★	
金10兩	30貫文	-----★	(収入比21%)
享禄5年(1532)~天文3年(1534)分			
金3兩買代(混首座齋料として到来の金)	9貫文	-----★	(収入比5%)
(→3-277号 享禄5年 宗混金子等贈進状→真珠庵納所宛)			
天文4年(1535)分1月~9月			
金1兩3分1朱買	5貫435文	-----★	(収入比3%)
(駿河福島殿より宗禅仏事のため上る金)			
天文4年(1535)分10月~			
☆金3兩沽却代(天文3)	8貫800文		
☆金9兩3分1朱半沽代(大永2)	30貫514文		

【表2】の分析

所領買得は、継続的だが、収入総額が100貫文を超える

大永2~5年分で、収入総額に対して、5割を超える率で、所領買得への「投資」はこの時期にピーク

大永2~5年以降は、ほぼ収入比でひとけたへ

金の買得の初見=永正15年。帳簿操作?、詳細は不明
 享禄2年と享禄4年分で、収入比でふたけたを超える
 →支出の主要な部分を占める
 金の売買は短期的に儲かったか?
 利ざやを稼いでいない。
 →資産価値の保全が金購入の動機

小結

「資産・価値の保全」のための「投資」先として、土地よりも、金に、その関心が移った
 →金購入が、土地の購入よりも、リスクの少ない、安全な投資先になったのではないか

第4章 金の価格変化と流通形態

【表3】=真珠庵での金の購入・売却の状況・価格

【表3】金の売買価格（典拠：史料③の巻末の「金註文」より作成）

（金1枚=10両、1両=4分=16朱で換算）

買/売・売買年月日・売買量	売買金額（金の単価）	[他史料の金価格]
買 1528/5/12 金3分3朱半	= 3貫文(→1朱≒193文、1両≒3090文)	[3000~3150]
買 1529 金3枚	= 90貫文(→1枚=30貫、1両=3000文)	[3100~3200]
買 1531 金3両3分2朱	= 11貫530文(→1朱≒186文、1両≒2980文)	[2700~2960]
買 1531/12/- 金1枚	= 30貫文(→1枚=30貫、1両=3000文)	
買 1532/7/- 金3両	= 9貫文(→1両=3000文、1朱≒187文)	[なし]
売 1533/8/21 金3両	= 8貫800文(→1両≒2933文、1朱≒183文)	[3000]
売 1534/1/2 金1枚	= 30貫514文(→1両≒3051文、1朱≒190文)	[なし]
買 1535 金1両3分1朱	= 5貫430文か(→1朱≒187文、1両≒3000文)	[なし]

※註：右の[]の数字は、神木氏〔1985〕の第4表「日本における金価格」の金1両あたりの価格。その表は、小葉田〔1943〕・京大の物価表などを典拠とする。

金価格の変動（【表3】より）

おおむね、神木氏の論考の金の価格表に同じ

1両=2900~3100文前後で価格は推移し、比較的安定

→金の財産としての安定性か?

金の流通形態

【史料c】史料①巻末付箋部分

貳貫六百文

金一両、(柴屋軒)宗長ヨリ買、貳貫八百、金ノ分也、但、残二百文分、金両目不足ノ間、如此、貳貫六百文ニ買也

拾三貫五百四拾五文

金四兩三分一朱々半買代

此金、伊豆長生ヨリ上テ、方々ハ寄進ノ代ヲ、此祠堂方ヨリ下行シテ此金ヲ買置也

この史料は永正15年の金の購入分について、記したものと考えられる。

【史料c】の前段の解釈

金1両では、2貫800文なのだが、その1両が、両目、重さが1両に足りなかったので、いちおうそれを金1両ということにして、200文安く購入した。

→秤量貨幣としての金の流通形態

古代以来の金の流通形態

砂金が一般的。室町時代にいたって同じ

【史料d】『蔭涼軒日録』寛正六年(1465)七月二十三日条

千阿普広院殿御代雲叟和尚法華講満散、御布施之様子、可註申之由有之、永享十年六月二日、公方様万匹、上様沙金一裏、盆一枚、記之遣之

→贈答用の沙金が多い

【史料c】=砂金ではなく、おそらくインゴット

金の両目の齟齬

金1両、あるいは金1枚=10両に関する、金の両目の不足などの齟齬の記事は、他にない

→金の両目が、かなり整った形で、すでに金が流通

金の東国での流通

永原慶二〔1998〕=永正年間、駿河の今川氏領国や奥州の伊達氏領国で、金が貨幣として流通

→【史料c】の後半部分では、「金四両三分一朱々半」が、伊豆の長生庵から寄進されたもの。この史料も、永原説を敷えん

小結

16世紀初頭、金は、インゴットの形で、東国から京都においては確実に流通

第5章 悪銭・銭・銀

金の使用=京都の大徳寺の場合

元龜三年(1572)十二月八日 大徳寺并諸塔頭金銀米銭出米納下帳(大徳寺文書8-2533)

→銭・金・銀、そして米を併記した帳簿の成立=銭だけでなく、金・銀だけでもなく、現物の米までも収入や支払い手段である貨幣として併用

金属貨幣と現物の併用は、この16世紀半ばには一般化し

→金・銀・銭の三貨体制が準備

悪銭の影響

【表4】悪銭と精銭・米の交換比率(真珠庵文書と大徳寺文書から)

永正7年(1510)頃 悪銭8800文を売→4800文に減じる

(京都、一休宗純33回忌納下帳、1-10号)

天文15年(1546) 悪銭5000文=米1石、悪銭は精銭の1/2の価値?

(越前からの年貢、大徳12-3043号)

永禄12年(1569) 悪銭4500文(売代3文立)→1450文

(越前?、越前から年貢、4-332号)

永禄12年 悪銭2143文(3文立)→714文(同上)

※典拠:いずれも真珠庵文書・大徳寺文書で私見に入ったもの

選銭関係法令

室町幕府の選銭令の初見は、明応9年(1500)

室町幕府法に悪銭の文字がみえるのは、永正2年(1505)の追加法334条=悪銭売買を禁止規定
永正3年(1506)の追加法344条=永楽銭などを100文に対して32文混ぜて流通させる規定

【表4】の分析

永正7年(1510)の京都、悪銭と精銭の比率は、精銭1に対して悪銭1,83で売買
天文15年(1546)、越前か京都、悪銭5貫文で米1石、もしくは、精銭1に対して、悪銭2の
比率

永禄12年(1569)、越前か京都、悪銭と精銭の比率は、3:1
→悪銭が、京都のみならず、越前などの地方でもかなり流通
年貢銭として上納された場合、寺院の領主経済に大きな打撃
銀については、何らの考察をするだけのものは用意できなかった。今後の課題としたい。

おわりに

大徳寺真珠庵の祠堂方は、文字通り、祠堂料や入牌料などの寄進を中心に運営されていた。
また、支出面では、所領の買得と金の購入によって、ある意味の「投資」「価値資産保全」が
なされていた。とくに、享禄年間には、所領買得よりも、金の購入が、主要な「価値保全」に変
化していった。

このことは、一般にいわれている銅銭の価値の流動化のみならず、所領の経営にも大きな不安
が生じたことを示している(原因は戦乱とみるべきか)。

また、金・銀・銭(悪銭)、米という4種類の貨幣の併存は、元亀年間には登場していたので
ある。

真珠庵祠堂方で、所領から金への転換は、そうした3貨併存の体制に対する準備であったとい
うことも推測できる。

同時に、銭で金を購入しているということは、金が銭に比べて、価値の保全に有効なものであ
ったことを示している。

それは、悪銭をつかまされることにくらべて、金は有効であった。あるいは、さまざまな種類
の貨幣で、財産をもつことで、流動化する貨幣価値の変動にそなえたものとみることができ
るかもしれない。

【主要史料】

『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』全14冊(東京大学出版会)

『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』別集 真珠庵文書之一～四(同上)

【引用・参考文献】

△浦長瀬隆 1985 「16世紀後半西日本における貨幣流通」(『ヒストリア』106号)

△浦長瀬隆 1985 「16世紀後半京都における貨幣流通」(『地方史研究』195号)

神木哲男 1985 「中世における貨幣使用—日本中世貨幣史の構成に際して—」

(『国民経済雑誌』152-5)

神木哲男 1991 「中世末—近世初期における貨幣問題」(『社会経済史学』57-2)

京都大学近世物価史研究会 1962(代表:小葉田淳編)『15～17世紀における物価変動の研究』
(読史会)

小葉田淳 1943 『改訂増補 日本貨幣流通史』(刀江書院)

小葉田淳 1958 『日本の貨幣』(至文堂日本歴史新書)

桜井英治 1996 『日本中世の経済構造』(岩波書店)

桜井英治 1997 「日本中世における貨幣と信用について」(『歴史学研究』703号)

- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』（東京大学出版会）
- 鈴木公雄 1999 「出土銭貨からみた中・近世移行期の銭貨動態」
（歴史学研究会編『越境する歴史学』所収、青木書店）
- 滝沢武雄 1996 『日本の貨幣の歴史』（吉川弘文館）
- 滝沢武雄・西脇康編 1999 『<日本史小百科>貨幣』（東京堂出版）
- 中島圭一 1999 「日本の中世貨幣と国家」
（歴史学研究会編『越境する歴史学』所収、青木書店）
- 永井久美男編著 1994 『中世の出土銭』（兵庫埋蔵銭調査会）
- 永井久美男編著 1996 『中世の出土銭 補遺Ⅰ』（兵庫埋蔵銭調査会）
- 永井久美男編著 1997 『近世の出土銭』（同上）
- 永井久美男 1998 「中世の銭から近世の銭へ」
（出土銭貨研究会第5回研究会報告要旨『信長入洛の時代』）
- 永原慶二 1998 「中世貨幣史における金の問題」（戦国史研究会『戦国史研究』35号、2月）